



8月23日 間さんらが被災地を駅伝で縦断
～KANPEIみちのくマラソン～



被災地を励ます走りを披露した
間寛平さん(右)ら

タレントの間寛平さんが総監督を務める「RUN FORWARD KANPEI みちのくマラソン 2016」が大槌町入りし、被災地を勇気づける走りを披露しました。間さんや若手芸人らは、砦内地区の仮設住宅も訪れて町民と交流し、間さんは「体に気を付けてな」「無理はせんぞな」と優しく語り掛けました。同企画に賛同した大阪府柏原市の中学生も一緒に安渡・赤浜地区を駆け抜け、大槌に元気と勇気を与えました。

8月31日 営業5年、惜しまれながら閉店
～仮設食堂「よってったんせえ」～

吉里吉里地区の「マリンマザーズきりぎり」が震災後の2011年8月から運営してきた仮設食堂「よってったんせえ」が、5年間の営業を終えて閉店しました。地元産のワカメを使ったラーメンやカレー、加工品などを安く提供。地域住民や観光客などから広く親しまれてきましたが、「みんなを笑顔にしたい」「人と人が会話をしている声が聞きたい」「被災地からの情報発信をしたい」との当初の目的は達成できた」との思いから、惜しまれながら閉店を決めました。



地域の憩いの場を支えてきた
スタッフの皆さん

9月3日 「大槌の 未来に続く 希望の火」
～希望郷いわて国体・炬火採火式～

希望郷いわて国体の総合開式で、県内各市町村で採火された炬火の一つにして生まれる「希望郷いわての火」の大槌町炬火採火式が、城山公園で行われました。炬火はオリンピックでの聖火に当たります。町では、阪神淡路大震災の時に神戸市で「1.17 希望の灯」として点灯された火を、東日本大震災からの復興と新しい希望を祈念して分灯された「希望の灯」から採火しました。炬火名は「大槌の 未来に続く 希望の火」です。大槌町では10月9日に城山公園体育館で、デモンストラレーションスポーツのソフトバレーボールが開催されます。



炬火採火式に臨む平野公三町長(中央)と子どもたち

9月9日 連携して早期通報と初期消火に尽力
～消防協力者に感謝状～

釜石大槌地区行政事務組合消防本部は、今年3月に大槌町内で発生した建物火災で、延焼拡大を未然に防いだ消防協力者4人に対し感謝状を贈呈しました。表彰されたのは、いずれも町内に住む松橋康弘さん、白沢和行さん、吉田優作さん、上野未生さんです。4人は、3月14日午後2時ごろ、沢山地区の個人住宅で発生した火災で、連携して早期通報と初期消火に尽力し、延焼拡大を防ぎました。



大槌消防署で行われた感謝状贈呈式に臨む4人

9月9日 吉里吉里の夜空に復興願う大輪の花
～秋田・平和中学校の交流花火～

秋田県大仙市の中学生の震災復興を願う思いが、今年も吉里吉里の夜空を色鮮やかに彩りました。同市の平和中学校(千田寿彦校長、生徒112人)の生徒らが主体となって運営する「第3回大槌・神岡交流打ち揚げ花火」が行われました。花火の合間には、両地域の住民のメッセージを生徒が心を込めて読み上げました。「吉里吉里に笑顔を咲かせよう」との思いが、まさに花火に乗って花咲かせました。



吉里吉里の夜空を彩った花火



交流花火で大槌町を訪れた
平和中学校の生徒

YOUNG OTSUCHI | No.07 ワカモノ紹介



吉里吉里学園
竹沢 瑞生さん
(14歳・中学部9年生)

全国大会出場
高校でも卓球続けたい

卓球部に所属する竹沢さんは、8月に開かれた岩手県大会男子シングルの部を制し、富山県で開催された全国大会への出場も果たしました。優勝シーンを「いつも通りやっただけ。試合が終わって、周囲から祝福されて初めて実感しました」と振り返ります。全国大会では初戦突破ならず、悔しい思いをしましたが「高校でも卓球を続け、活躍したい」と意欲を燃やします。卓球を始めたのは保育園のころ。自宅の卓球台で、父親や兄と一緒に楽しんでたそうです。「大人になっても卓球を続け、機会があれば後輩や地域の子どもたちに教えてみたい」と照れくさそうに話してくれました。大槌の好きなところは「やっぱり海。復興にはまだ時間がかかるが、昔のように安心して遊べる海水浴場を残してほしいです。」



特集1
大槌まつり

平成28年度の「大槌まつり」が9月16～18日の3日間、開催されました。安渡地区の大槌稲荷神社と、町方地区の小鎚神社の例大祭で、ともに宵宮祭と神輿渡御を展開。神輿渡御では、男衆が威勢のいい掛け声を響かせながら町内を練り歩きました。観客の熱気に御霊が呼応し、神輿が何度も回りました。虎舞、鹿子踊、大神楽などの郷土芸能をはじめ、総勢18団体が参加。両神社境内での宵宮祭、神輿渡御の御旅所、今年から町役場庁舎前に開設された「お祭り広場」などで勇壮、華麗な舞を披露し、まつりを華やかに彩りました。最終日の18日、小鎚神社神輿渡御の最後の御旅所となる小鎚川の両岸は、多くの観衆で埋まりました。2基の神輿が川に入り、掛け声を一層大きくした担ぎ手たちが川の中を行きつ戻りつすると、熱気は最高潮に達しました。

震災から5年半以上が経過。まつりに託した「鎮魂の祈り 復興への希望」。神輿の担ぎ手、舞う人、見る人、そして大槌を支えてくださる多くの人、それぞれの胸に迫る思いが結実した「大槌まつり」でした。まつりが終わり、大槌はこれから秋本番を迎えます。